



平成27年8月25日
佛教大学附属幼稚園

共感の大地を歩めば

園長 藤堂俊英

残暑の中にも朝夕の風に季節が移るのを感じる昨今となりました。感じるとは、何かにところが強く動かされることをいいます。夏休みが終わり、2学期が始まります。空気も澄み、爽やかな気候の中で、食欲も旺盛になり、子どもたちの個性あふれる成長が感じられることを楽しみにしています。

この園だよりに子どもたちのつぶやきが紹介されることがあります。読んでいて子どもたちの成長の今を感じます。1学期のある日のことです。私の傍にいた園児の足元に、突然、何処からか虫が這い出てきました。それを見つけた男の子の口から、「どこかにごはんがないかさがしにきたんだ」というつぶやきが聞こえてきました。お昼の給食を食べた後だったので、虫さんの空腹を感じ取ってあげたのでしょう。そのつぶやきに、ところが癒されるような共感を覚えました。

「つぶやき」は漢字では「口」偏に、「暗くて、奥深くてよく見えない」ことを表す「玄」を加えて「𠂔」と書きます。日本語の「つぶやき」の「つぶ」は「小さな粒」を連想します。この奥深くからストレートに、ふと出てきた言葉の粒、それが「つぶやき」なのでしょう。以前、園内研修で先生がたに「いのちと言葉」という話をしたことがあります。その折のフリートークの中でも、子どもたちのつぶやきが話題になりました。ある先生から「子どもたちの生活のペースを知るために、つぶやきを集めてみたことがある」と紹介がありました。何気ない言葉の粒のなかに、その子の内面がポッと出てくるというのです。

最近、お母さんたちが子どものつぶやきなどを書き止めた、『子どもの詩』（花神社）とか『あたまわるいけど学校好き』（中公新書ラクレ）といった詩集が出ています。二冊とも詩人の川崎洋さんが編集したものです。その中からいくつかを紹介してみたいと思います。（ ）内の言葉は川崎さんの感想です。

「おかあさん」って きもちのいい ことば 3歳 加藤雅子（ああっ！）。
お空が 夕方のようにしてる 3歳 よねもと あきふみ（短い言葉で、よくも！ とただ感心）。
もうちょっと ゆっくりの とけい かいたい 4歳 吉沢一貴（朝、幼稚園の支度をせかされてのことば。わたしも三倍ゆっくりのとけいがほしい）。
パパは まいにち かいしゃで おすなあそびをしているんだよ だって おくつに すなが はいっているから わかるよ いまごろ ママのかおを かいてるのかなあ 5歳 平田結美（「パパは建築業です」と書き添えてありました。この詩は、幼児が大人のために歌った子守歌なのだと思います。なんていい歌！）。
お母さん あの黒い子どもたちかわいそう あんなにやせてしまって 手がなんだか棒みたい（その理由を私から聞き） だったら いいこと考えた あのお母さんたちは 日本にきて赤ちゃんを産めばいいじゃない そしたら 食べ物がたくさんあるから ね そうでしょ 5歳 八木沼貴子（テレビでアフリカの飢餓状態の子供たちを見ての発言をお母さんが書き止めました。私は突き刺されるような痛みを覚えました）。

大地の上に暮らす私たちは、また「共感」という大地の上に暮らしています。人が人として生きていく上に不可欠な共感の大地を、子どもたちが全身で感じる機会をしっかりと確保してあげる。そこに子どもたちの傍らに立つ大人のつとめがあります。共感の大地の上を歩む者からは、憎しみも、争いも、自分だけを是とするおごりの心も生まれてきません。